

## サセックス・ダウンズメン協会 (The Society of Sussex Downsmen) の活動:1946-1947

坂梨 健史郎

### はじめに

イングランド南部に位置するサウス・ダウンズ (the South Downs) は、東はイースト・サセックス州から西はハンプシャー州にまで続く長大な丘陵地帯であり、それはロンドンを含むイングランド南部の多くの人々に今日まで愛されてきた。それは牧草地として機能しただけでなく、人々に散策と眺望の場を与え、その景観はイングランド南部の、時にはイングランド全体の自然のシンボリック的存在となってきた<sup>1</sup>。

そのサウス・ダウンズのサセックス州内での景観保全やそのほか通行権等の保護を主な活動目的とする団体がサセックス・ダウンズメン協会 (The Society of Sussex Downsmen, 以下「SSD」とする) である。この非営利組織は1924年、サセックス在住の文人アーサー・ベケット Arthur Beckett を会長として、サセックス州およびロンドン在住の名士によって結成された。SSDは今日でも活発な活動を続けているが、本稿は前稿に引き続き1946年1月から1947年2月にかけての活動状況について記述するものである<sup>2</sup>。

この時期で最大の懸案の一つがダウンズの接収解除であったが、戦時中にダウンズ内に敷設された軍用道路の扱いもその一部であった。1946年1月、F・パドガム (Padgam) からリアン・ベイトリー宛に、以下のような書簡が届いた。「同封のサセックス州警察からの書簡はSSDの事務局長としての貴殿の関心を引くと確信いたします。ホワイトランドのクレイトン・ミルズからディッチリング・ビーコンの間において、軍事的必要性から陸軍が切り開いた急傾斜の悪路を自動車族が使用しているとの苦情を送ったところ、それに対する返信として受け取ったものです。私達の愛する丘陵地帯が自動車の溜まり場にならないように何らかの注意がなされ得

るはずです。」

パドガムが同封したサセックス州警察本部長補 (Assistant Chief Constable) R・ブレフィット (Breffitt) からの返信 (1945年11月28日付) は、「貴殿よりの1945年11月11日付の書簡に関しましてご通知せねばなりません。照会させたところ、ダウンズの軍用道路上での運転に関しては、当該道路が防衛規定上立ち入り禁止となっていない限り何らかの措置を取る事は不可能と思われます」という冷淡なものであった。

この件に関し、議事録には「陸軍省及び警察からの書簡に関する会長による所感」なる以下の文章が添付されている。「陸軍省書簡で考慮すべき点は、(1) 防衛規定の下で軍により道路が建設された場合、それは公道になる事を意味するのか？(2) 仮に斯かる軍用道路が既存の公道上に建設されている場合、それは公的機関に委譲されるのか？の二点である。また警察書簡については(3) 州警察本部長補からの書簡から察するに、これらの道路は公道となり、誰もが車両通行に利用でき、斯かる土地の所有者は異議の申立てや補償を求める一切の権利を失う。(4) イーストボーンやシーフォード等の土地を所有する公的機関は望めば補償を要求し、所有のダウンランドを戦前の状態に復帰させることも可能である。」

また1945年11月に発生したクロウリンク (Crowlink) に於ける通行妨害の問題も依然未解決であった。同地の農場の一つをイースト・ディーン在住のカナダ人が取得し、ダウンズの一部を鉄線 (wiring) で囲い込む許可をナショナル・トラスト (National Trust) に求めている件である。<sup>3</sup>。1946年5月11日にルイスのストーンズ・カフェにてSSD評議会 (Council) 緊急会議が開催された。冒頭、会長が発言し、クロウリンクの件に関する往復書簡の全容を評議会の全構成員はすでに参照しており、この集会の目的は同地でのナショナル・トラストの代表者との会見について、当評議会の見解を確認することにあると述べた。

それを受けて書簡を通じてなされたことに関しさまざまな会員が意見を表明し、SSDが取るべき態度については全会一致で決定がなされた、すなわち公衆により購入されたこの土地のいかなる部分にも鉄線の設置は許されず、当初の契約に定められた通りいかなるときも開放地 (open space) であり続けるべきであるというものである。会長は、ナショナル・トラストは公衆に代わる同地の管理人であり、斯かる合意は厳守されるべきである、との持論を述べた。会長は付言して、ナショナル・トラストとの会見

は1946年5月17日金曜日午後2時にフリストン教会にて行われる予定で、会長は出席を見合わせるが、出席した会員は後日全員出席の理事会にて報告することとする。これがもっとも賢明な策と思われた。

上記で会長が触れた「ナショナル・トラストとの会見」は予定通り開催され、席上ナショナル・トラストから提案があった。それは「セヴン・シスターズおよびクロウリンクとして知られるダウンランドの区域上に囲い込み農業の目的で各種の柵を設置することにSSDが同意する」というものであった。

1946年6月1日にルイスの聖ミカエル旧牧師館にてSSD理事会が開催された。ナショナル・トラストよりの上記提案については「長時間の議論」が行われ、以下の決議がナショナル・トラスト宛送付された。「SSDはこの件に関する過去の取引を熟知している。すなわち470エーカー〔著者注：約2平方km〕に及ぶダウンランドが公衆の寄付によって当初のダウンランドの状態で購入されたということであり、かつ1931年9月に同地がナショナル・トラストをその保護者として委譲され、その目的は同地が常時公衆の娯楽と使用に供される開放地として維持されるため、ということである。よって、SSDは上記の提案に同意する用意はない。同提案は関係者全員による背任行為 (a breach of trust) とみなされるであろう。近隣及びその他の地域の多くの土地が農業用には使われてはいないにも拘らず、ナショナル・トラストがこの公衆リクリエーション地をそのような目的で使用することを許可せんとすることをSSDは遺憾とするものである。」

同理事会では引き続き他の議題が話し合われた。ダウンズ上の道路に関しては、「前回理事会にて可決した決議に関する〈入会地及びフットパス協会〉よりの返信は理事全員に回覧済みで、様々な意見や反応が出されている。この件に関してはこれ以上の議論はなされなかった」。

次にダウンズ上の軍用施設の撤去については、A. M. ラフから、「先日、未使用の飛翔体 (missile) を発見し、直接警察と共同で対処中である」との報告があった。なおダウンランドの接收解除については「1946年4月27日の年次総会での決議は陸軍省に送付され、正式な回答を受け取るばかりになっている」との報告がなされた。

また同理事会ではリッチモンド・ウィーラー博士 (B.A., M.Sc, Ph.D.) を同一任期にて副会長に再選することが提案された。

1946年10月26日の理事会において (a) クロウリンクの件は再び議題と

なった。「ナショナル・トラストからの提案全体は地元と全国の新聞においてすら表明されており、(中略)議会において数多くの質問がなされているが、1946年10月30日に国会議員であり弁護士であるアントニー・マーロウが法務総裁 (Attorney General) に質問するので、ブリュフォード氏は可能な限り全ての情報をマーロウに送っている。柵の設置に対するSSDの反対運動が継続していることについては、利害関係のある複数の団体が『タイムズ』紙に寄稿し、SSDがこの論争を耳目を集める手段として利用していると非難した。事務局長は同寄稿を読み上げ、併せてSSDの名誉と理事会の威信を保ち、またSSDの原則と目的を繰り返す彼女の返信を読み上げた。仮にナショナル・トラストに対して同企画を断念させることが究極的には出来なかったとしても、SSDは少なくとも公衆に対する任務を果たしたと感じられた。SSDに関しては現時点では全力が尽くされたと合意された。法務総裁からの返答の結果については関心を持って今や待たれることとなった。」

また同理事会においては (b) ダウンズの道路について、「地区担当者からの諸報告の中で、多くの区域で植生が当該の道路を覆っている事実が見受けられるのは喜ばしい」と事務局長が述べた。

(c) 軍用施設の撤去について事務局長が報告した。ランシングの一住民より電話があり、撤去作業に使用されるブルドーザーによるダウンズへの損害に注意を喚起するものであった。樹木さえ引き抜かれているこの特定の事件については新聞も報道していた。

(d) ダウンランドの接収解除については「1946年4月27日の年次総会にて可決された決議はようやく1946年9月10日付で陸軍省より回答があった。極めて不満足な内容である同回答の写しは各理事に回覧された。暫時議論の後、3案件 (b) (c) (d) の全てが究極的には政府の決定に依拠するため、我々SSDとして出来ることはサセックス州選出の国会議員に圧力を掛け続けることしかないとの結論に達した」。

つぎに廃線になったダイク鉄道について、廃線跡をフットパスとして寄贈するとの提案に関して、「ホウヴ (Hove) 市自治体からの回答ははかばかしくなかった。次いでカックフィールド田園地区評議会に打診し、最終的にはこの事案はイースト・サセックス州評議会に達した。同評議会は同事案を同情的に考慮したが、種々の困難に鑑みて同提案の取り止めが決定した。SSD及びその他の団体はこの旧軌道が道路になる可能性を不安視し

ていたが、この恐れは除去された」との報告があった。SSD事務局長はイースト・サセックス州評議会書記宛に感謝の書簡を送付することとなった。

同理事会ではカクミア・ヴァリー (Cuckmere Valley) も議題となった。同地域に建設用地の掲示が出現し不安を呼んでいた。地区計画官のウォーデルは斯かる掲示の出現を認識しており、同地区の以前よりの監視をさらに繰り返して行っていた。SSDよりの同書簡は回覧、承認され、暫時の議論の後、原文をSSD会長のビーミッシュ海軍大将に送付し、子息のビーミッシュ少佐に依頼して都市田園計画省大臣ルイス・シルキン (Lewes Silkin) に個人的に届けることが合意された。

つぎに事務局長より所得税関係の報告があった。所得査定官 (Inspector of Taxes) より来信があり、SSDの投資案件につき照会があった。SSDは常に慈善団体 (Charitable Society) とみなされており、今まで所得税は払っていなかった。しかし内国歳入局委員会 (Commissioners of Inland Revenue) 幹部達は斯かる見解は共有せず、SSD会長の提案により本案件は [ロンドン市] ウェストミンスター区アビー・ハウスのTax Protection Societyに送付して助言と指導を受けることになった。

つぎに広報委員長からの報告があった。

ダウンズにおいて相当量の弾薬を発見し、即座にサセックス州警察に通報された。地元の新聞にも通知した結果、『サセックス・デイリー・ニューズ』『ジ・アーガス』『ブライトン・ガゼット』『ジ・イヴニング・ニューズ』『ザ・デイリー・テレグラフ』の各紙でSSDに好意的な報道がされた。

ダウンズにおけるブルドーザーの使用について、ランシング及びディッチリング・ビーコンにて発生した事案の経緯をHGS [筆者注・国防市民軍兵士 (Home guards) か] から知らされた結果、委員長は可及的速やかに自分自身のエリアを訪れ、ダイクとニューティンバーが同様の扱いを受けていることが判明した。即座に報道機関に連絡し、一連の関連する記事及び写真が掲載された。

各ランプリング・クラブへの回状について、現行の会員募集パンフレットは書き直すか完全に改訂して、戦中戦後のSSDの仕事に触れるべきであるとして、委員長が草稿案を作成して承認を求めることとなった。

最後にウィーラー博士が、クロウリンクのホリデイ・フェローシップでサウス・ダウンズをテーマに自身が行った講演について報告した。

1947年1月29日開催の理事会においては、まず事務局長よりクロウリン

クの件で報告があった。「事務局長が『タイムズ』紙に宛てて1946年10月24日付で送った投書は掲載されなかったが、1946年11月1日付『サセックス・エクスプレス』紙に掲載された。『ロイズ・ログ』(Lloyd's Log) 11月号に載った記事はクロッカー氏よりの寄稿である。その他の記事も掲載され、サセックス州の全新聞に折に触れ事実関係を提供している。[SSDの] イーストボーン委員会、SSD会長と私との間で様々な点について書簡が交わされている。イーストボーン委員会は以下の点を公衆に印象付けるべく腐心している。『SSDは公衆の利益を擁護するために存在する。本件におけるその権利は明々白々であった、すなわちSSDは同ダウンランドを永久にオープン・スペースとしてかき乱されることなしに置かれるべく購入したのであり、ナショナル・トラストにより農地として貸し出され、耕され、家畜用に柵が設置されるためにではない』ということである。」

1947年1月11日にクロッカー氏が以下の文面の書簡をブリュフォード氏に送ってきた。「ハリエニシダの繁茂を抑えて草を刈り込むことにSSDは責任を引き受けるのか。」彼はまた同書簡中で付言して、自分が確認したところでは商業的な問題からもはやダウンランドで羊を飼うことは不可能である、というのは羊飼いを週給5ポンド未満ではもはや雇えないためである、と述べた。彼はまた、ハリエニシダの繁茂を抑えて草を刈り込むことに同意するかどうかSSDもしくはどこか別の団体が可及的速やかに決定すべきだ、遅れは困惑する事態を引き起こしつつあると述べた。

その後(1947年2月8日)の理事会において、同提案が長時間議論され、最終的にSSDは斯かる状況下で当該地所を引き受けることに同意できない、そして理事会の決定をクロッカー氏に伝えるという提議がウィーラー博士によりなされ、全会一致で可決された。

1947年1月29日の理事会においては、ダウンズの鉄条網除去が議題となった。「鉄条網の切れ端の危険につき、多数の苦情を受信済み。ダウンズの多くの区域に残置されていて、徐々に埋没しつつあるがなお危険状態にある。最新の苦情はワシントンからのものである。1946年12月23日に陸軍省(War Office)に書簡を出し、以下の返信を受け取った。「指示により貴殿にお知らせ致します。陸軍による訓練目的で近年使用されたサウス・ダウンズの全区域における戦時施設の除去は農業水産省の管轄です。しかしながら付け加えますならば、同省(this Department) [筆者注・農業水産省を指すか] は鉄条網の撤去に関して大きな問題に直面しており、この

一般的問題は検討中です。War Department [筆者注・陸軍省を指すか] はもはやこの目的達成のための方策がありませんので、いかなる提言も歓迎いたします。」

その後(1947年2月8日)の理事会において、同問題が検討され、この州になおも存在するドイツ人捕虜達をこの除去に活用できるかもしれないという提案に達した。また「イースト及びウエスト・サセックス州双方の戦時農業管理委員会(War Agricultural Executive Committees)代表者にSSD事務局長が有効に接近して、撤去に成功した区域 — スタンマーとディッチリング・ビーコン間のダウンズがその傑出した事例のひとつ — において用いられた手法を問い合わせる」ことも提案された。

## まとめ

戦時中にダウンズ内に敷設された軍用道路を自動車族が使用している問題は、この道路が公道として固定化されてしまうのではないかという懸念をSSDに抱かせた。クロウリンクのダウンズに於ける通行妨害の問題に関しては、全国紙への寄稿でSSDが非難される中、同地を開放地として維持したいSSDと農地としての利用を許可したいナショナル・トラストが互いに譲らず、協議は平行線に終わった。ダウンズの軍用道路および軍事施設の撤去やダウンズの接収解除についてはいまだ政府の決定待ちの状態であった。鉄道の廃線跡をフットパスとして寄贈する構想は実現しなかったが、廃線跡が道路に転用されるのを阻止するという目的は達した。この他にもカクミア・ヴァリーでの建設用地の揭示、SSDに対する課税、ダウンズ内での武器弾薬や鉄条網破片の残存、重機の使用、ハリエニシダの繁茂などの諸問題にSSDは対応を迫られた。

## 注

1. Peter Brandon, *The South Downs* (Chichester, 1998), xv.
2. 本稿の史料は英国イースト・サセックス州文書館(East Sussex Record Office)所蔵の「サセックス・ダウンズメン協会運営委員会議事録(The Minutes of the Executive Committee of the Society of Sussex Downsmen)」およびそれに添付された書簡や文書である(整理番号ACC6849)。なお、SSDは現在では「サウス・ダウンズ協会(South Downs Society)」という名称になっている。

3. 坂梨健史郎「サセックス・ダウンズメン協会 (The Society of Sussex Downsmen) の活動：1945-1946 (続き)」, 『CONTEXTURE 埼玉工業大学教養紀要』, 32, 45-51 (2015. 3)